序

神田より子

5年 あなたと共に 東日本大震災 人のため 父の志継ぐ」

りました。」「ひ・さ・と」は両親と、震災で亡くなった祖父富弥さん(同 た。「人の役に立てることが、亡き父への親孝行だと思えるようにな ある日、田老の仮設診療所で、患者をいたわる母を見て思い直した。 母は父を探す間もなく、看護師として避難所を駆け回った。人に尽 ればならなかったのか」と祭壇に向かって語りかけた。消防団員の 葉を述べた。山本さんは「なぜ父は防潮堤の水門を閉めに行かなけ 日新聞』2016年3月12日版1面より引用 81) の名前の頭文字。その誇りを胸に生きようと思う。」(以上『朝 「私もこうなりたかったんだ。」昨年4月に復学。看護実習を乗り切っ が進学した大学は3年の途中で休学。郷里の期待を重圧に感じた。 くした父と母。山本さんは看護師になろうと思うようになった。だ 方不明に。山本さんには、住民を守ろうとしたのに理不尽に思えた。 父幸雄さん(当時49)は宮古市田老の巨大防潮堤へ向かったまま行 の遺族代表として、東京の国立劇場で行われた追悼式で、追悼の言 「何でおっとうなの」。悲しみと怒りを母ヒデさん(50)にぶつけた。 「2016年3月11日に宮古市田老の山本永都さん(22)が岩手県

はじめに

だ。で暮らし、明日の希望を見いだせないでいる方々もおられるのが現状の小事の歩いででで、5年もたったのに未だに仮設住宅第一歩を踏み出していた。一方で、5年もたったのに未だに仮設住宅うに、若い人が震災をバネに新たに生きる力を見いだし、その先への東日本大震災から5年がたった2016年3月11日、ここに見るよ

私たちは主に民俗学の方法により、様々な立場の方々から、そのときおける宮古市民の方々の記憶を記録にとどめておこうという活動だ。 そうした中で私たちが取り組んできたのは、今回の東日本大震災に

録する作業を行ってきた。援のあり方など、お一人お一人から聞き書きをし、皆様方の記憶を記い」を聞かせていただいてきた。そして現場での対応の仕方、後方支廻りの方々にどう行動して欲しかったのかという実体験を踏まえた「思どう行動したのかといった被災の体験、どう行動すればよかったのか、

地域の景観ががらりと変わってしまい、海が全く見えなくなってしまい。 最親ががらりと変わってしまい、海が全く見えなくなってしまい。 はいつかまた来る災害の足の確保はどうすれば良いのか等々、今後の課題は山積みである。 また住宅地と商店街が離ればなれになってしまい、買い物弱者の足の確保はどうすれば良いのか等々、今後の課題は山積みである。 また住宅地と商店街が離ればなれになってしまい、買い物弱者の足の確保はどうすれば良いのか等々、今後の課題は山積みである。 しかし祖父と父との思い出を、そして患者さんのために懸命に働くの足の確保はどうすれば良いのか等々、今後の課題は山積みである。 しかし がった いつかまた来る大震災にどう備えれば良いのかという不安がまって、いつかまた来る大震災にどう備えれば良いのかという不安がまって、いつかまた来る大震災にどう備えれば良いのかという不安がまって、いつかまた来る大震災にどう備えれば良いのかという不安がまって、いつかまた来る大震災にどう備えれば良いのかという不安がまって、いつかまだまる。

本報告の概要

今回の東日本大震災における宮古市の被害概要(平成24年11月6日今回の東日本大震災における宮古市の被害概要(平成24年6月29日現在)は、人的な被害については死亡者517人(認定死亡者110年137頁より)。

ATの活動、福祉、保育、

②災害救助と支援体制、災害廃棄物の処理、地域に分けて調査及び考察を行った。続いて第2部では

①医療、DMの上で第1部では、大きくA田老地域、B宮古地域、C重茂地域と3震災、第2部各分野での震災後の取り組みという2部構成とした。そこうした状況を踏まえ本報告書は、第1部各地域における東日本大

た。以下では個々の内容について紹介してゆく。り、5海外メディアが伝えた東日本大震災の報道という分類で記述し外国人の被災体験、4被災した芸能と復活、震災と暮らしの移り変わ(3ボランティア活動、自治体の交流、観光復興、宗教団体の取り組み、

第1部 各地域における東日本大震災

A 田老地域

田老地域は過去にも津波による大きな被害が出ており、明治29年の経承さえままならない状況だった事が窺える。

古市の記録 第1巻 (津波史編)』)。 古市の記録 第1巻 (津波史編)』)。

生活や仮設商店街の様子などを述べた。合事務所の動き、グリーンピア三陸みやこでの避難所生活、仮設でのを聞き取り、記録した。主に田老地区における支援体制として田老総ここでは津波の被害に立ち向かっていった方々の日々の行動と記憶

方、田老では「NPO法人立ち上がるぞ!宮古市田老」が田老の

という活動を展開している。 今後の復興に寄与することを目的に立ち上がり、「津波防災文化の発信_

B 宮古地域

57人、行方不明者は3人であった。は5人、磯鶏地区の死者65人、行方不明者は7人、津軽石地区の死者地区の死者57人、行方不明者は8人、市街地の死者68人、行方不明者、その被災概要は、崎山地区の死者22人、行方不明者は9人、鍬ヶ崎

た波が蛸の浜町下でぶつかり、平坦部がほぼ全滅の被害となった。とくに鍬ヶ崎地区は、漁港の全てを破壊した波と、蛸の浜の峠を越えり閉伊川河口でもあるため、大津波が直接襲い甚大な災害を被った。崎山、鍬ヶ崎、築地、愛宕地区は、鍬ヶ崎を中心とした漁港でもあ

とが多かったようだ。

宮古の市街地は近年堤防ができ、建物が立ち並び、生活の中で近くとが多かったようだ。

区ではほぼ全家屋が流出し、この地区での家々の再建は不可能となり、そのため稲荷橋が水没し、津軽石駅付近で列車が脱線した。法の脇地津軽石は津軽石川水門を越えて津波が川を遡り、根井沢川に入った。高浜地区センターが全壊、金浜地区の平坦地の住家がほぼ全壊した。高浜・金浜地区では国道45号線が走る堤防を津波が越えて浸水し、

て。のおよそ半分を、一瞬のうちに飲み込み、その被害は甚大なものとなっのおよそ半分を、一瞬のうちに飲み込み、その被害は甚大なものとなっ域で、津波は赤前の4つの集落を含む平野のほぼ全域と、堀内の集落歩前地区は、宮古湾がもっとも奥に入り込んだ最南端に位置する地

全戸が地区外に移転となった。

(重茂地域

組合員17人)を数え、家屋は全壊が8、倉庫全壊が355に上る。地区の被害(2012年4月1日現在)は死者・行方不明者50人(内平成23年6月23日に行われた「重茂漁協総会資料」によると、重茂

10億円の被害であった。 三陸沿岸随一の品質と水揚げ量を誇る漁業の地域であり、全ての三陸沿岸随一の品質と水揚げ量を誇る漁業の地域であり、全ての三陸沿岸随一の品質と水揚げ量を誇る漁業の地域であり、全ての三陸沿岸随一の品質と水揚げ量を誇る漁業の地域であり、全ての三陸沿岸随一の品質と水揚げ量を誇る漁業の地域であり、全ての三陸沿岸随一の品質と水揚げ量を誇る漁業の地域であり、全ての

失いたくない、という思いの一途さだったという。とさえ言われたが、それは海に出て仕事がしたい、若い人を地域から復興に向けて立ち上がった漁協と組合員がいた。その結果「奇跡の復興」震災直後は、橋の崩落・道の決壊により陸の孤島となったが、漁業

(1)医療、DMATの活動、福祉、保育第2部(各分野での震災後の取り組み)

に最善をつくし、力の限り活動した医療従事者たちの姿を伝えた。論が無い状況下での決断、実行する勇気、住民の命と健康を守るため、体存など課題が山積みだった。多くの患者や住民を守るため、医療剤や物資の不足、治療を必要とする人々、精神面での不安、アルコー3・11以降、医療現場では寒さと疲労、衛生面の問題、感染症、薬

について報告をいただいた。 Tの活動を行った。岩手県庁調整本部と宮古医療圏でのDMAT活動調整本部を設置し、沿岸の災害拠点病院と連携・調整しながらDMA活動についてのご寄稿があった。県内の活動調整を行う県庁DMATの岩手医科大学医学部災害医学講座教授 眞瀬智彦氏より、DMATの

古市の福祉サービス事業所の職員に伺った話を紹介していく。被害にあった住民の方々、田老地区の福祉サービス事業所の職員、宮いて聞き取った事柄をまとめた。「福祉」をキーワードに、田老地区でして福祉サービス事業所の職員たちが、どのように行動したのかにつ東日本大震災で高齢者や障がい者といった要援護者やその家族、そ

を守る仕事とは何か」をあらためて問う事となった。をしつづけた。女性の仕事とされてきた保育士や幼稚園教諭という「命き、最後まで残った子どもを無事保護者へ引き渡すまで最大限のケア保育士や幼稚園教諭たちは、園児の命を守るために安全な場所へ導

(2) 災害救助と支援体制、災害廃棄物の処理

ラブ、婦人消防協力隊、女性消防団員、保健師の方々にも体験を語った、東日本大震災直後から地域の中でリーダーシップを発揮し、一方、東日本大震災直後から地域の中でリーダーシップを発揮し、その活躍には頭が下がる思いであるが、なぜそこまでやるのか、といく、避難誘導、そして自衛隊や広域消防隊の道案内などを行ってきた。ら話を伺った。彼らは地域住民を救うために命がけで救助、捜索、消ら話を刺った。彼らは地域住民を救うために命がけで救助、捜索、消災害救助と支援体制に関しては、消防署、警察署、自衛隊の方々か

制から、被災地での活躍の軌跡等を時系列に従って記録した。が焼き付いていると実感することができる。ここでは自衛隊の初動体災者の皆様の記憶の中に、救い主としての自衛隊の方々の活躍する姿今回の災害の現場で、自衛隊の活動は目を見張るものがあった。被

管として私有地に埋めた。東日本大震災では、災害廃棄物の量は、宮古市だけで5万4千900東日本大震災では、災害廃棄物処理がなされ、1都1府13県の自治人の協力を得た。水産廃棄物は海洋投棄が認められないため、一時保持の協力を得た。水産廃棄物は海洋投棄が認められないため、高いでがよった。、五礫の仮置き場は出崎埠頭、藤原埠頭、宮古運動公園、田老野球場、た。 五礫の仮置き場は出崎埠頭、藤原埠頭、宮古運動公園、田老野球場、た。 五礫の仮置き場は出崎埠頭、藤原埠頭、宮古運動公園、田老野球場、た。 五礫の仮置き場は出崎埠頭、藤原埠頭、宮古運動公園、田老野球場、た。 五礫の仮置き場は出崎埠頭、藤原東物として処理された。 岩手県 2011年: 、とされる。 一時保管として私有地に埋めた。

組み、外国人の被災体験ボランティア活動、自治体の交流、観光復興、宗教団体の取り

(3)

かかわっている点も指摘できる。 東日本大震災後、多くのボランティアが被災地に駆け付けたことは 東日本大震災後のがでの経験と、国際カリタ 記憶に新しい。カリタスは、阪神淡路大震災での経験と、国際カリタ 東日本大震災時にも直後から各地で活動を開始し 東日本大震災時にも直後から各地で活動を開始し 東日本大震災時にも直後がら各地で活動を開始し

復興に向かっているのかを取り上げた。さくない。ここでは宗教の被災経験、支援活動、そして、どのように気強い長期間のケアが必要となる。宗教関係者の果たすべき役割は小心に押し出された行動である。震災から5年が過ぎ、心の復興には根内外からの宗教団体が陰に陽に関わっていた。宗教を基盤とした利他宗教団体の取り組みとして、被災直後から支援が寄せられたが、国

る外国人との関わり方について考える情報を提供する。ていた。ここでは外国人の被災体験を振り返り、大災害や日常におけ2010年12月31日の時点で、宮古には160人の外国人が暮らし

(4) 被災した芸能と復活

えた。 宮古市津軽石法の脇鹿子踊りの復活への経緯にも大きく影響を与れることとなり、法の脇鹿子踊りの復活への経緯にも大きく影響を与れることとなり、法の脇鹿子踊りの復活への経緯にも大きく影響を与れることとなり、法の脇鹿子踊りの復活への経緯にも大きく影響を与れることとなり、法の脇鹿子踊りの復活への経緯にも大きく影響を与れることとなり、法の脇鹿子踊りの復活への経緯にも大きく影響を与れることとなり、法の脇鹿子踊りの復活への経緯にも大きく影響を与れることとなり、法の脇鹿子踊りの復活への経緯にも大きく影響を与れることとなり、法の脇鹿子踊りの復活への経緯にも大きく影響を与れることとなり、法の脇鹿子踊りの復活への経緯にも大きく影響を与れることとなり、法の脇鹿子踊りの復活への経緯にも大きく影響を与れることとなり、法の脇鹿子踊りの復活への経緯にも大きく影響を与れることとなり、法の脇鹿子踊りの復活への経緯にも大きく影響を与れることとなり、法の脇鹿子踊りの復活への経緯にも大きく影響を与れることとなり、法の脇鹿子踊りの復活への経緯にも大きく影響を与れることとなり、法の脇鹿子踊りの復活への経緯にも大きく影響を与れることとなり、法の脇鹿子師とは大きく影響を与れることとなり、法の脇鹿子師とは、

況は、日本全国各地だけではなく海外からも、震災に負けない復興の後の神楽の巡行の行方について述べた。とくに震災後数年間の活動状被災地代表としての黒森神楽、神楽が果たした地域の再生、そして今楽衆の被災状況、黒森神楽の宿の被災と復興、震災後の神楽の巡行、郷子頭を奉じて廻って歩く神楽衆も、共に被災者である。ここでは神県内の被災地と重なっており、神楽宿を提供してきた地域の方々も、黒森神楽が廻って歩く陸中沿岸地方は、今回の東日本大震災の岩手

シンボルのように招かれて活動してきたので、そのことにも言及した。

震災と暮らし

継者がなく、自分の代で最後という人が多い。多くは震災前に姿を消し、まだ現役で仕事をしている職人も高齢で後鋸刃職人、染色などさまざまな職種の職人によって支えられてきたが、宮古の漁業は船大工、櫓大工、網大工、鍛冶屋、イカ角職人、桶職人、

を記述した。後の職人」として生きて来た人々が、どのように震災と向き合ったか後の職人」として生きて来た人々が、どのように震災と向き合ったかここでは、職人の生活誌を追い、宮古の移り変わりと、その町で「最

海外メディアが伝えた東日本大震災の報道

(6)

のかを調べ、分析した。本稿は、『人民日報』と『四川日報』が東日本大震災を如何に報道したない2011年3月11日、マグニチュード9・0の地震発生を知った。中国の大学で教鞭をとる何為民は、日本での留学を終えて帰国間も

参考文献

岩手県『岩手県災害廃棄物処理詳細計画』2011年田老町教育委員会『田老町誌 津波編』2005年宮古市『東日本大震災宮古市の記録 第1巻《津波史編》』2014年